

編集後記

“「問題発見」というのは、「何か変？」という「感じ」に反応することです。これがコミュニケーション能力のうちで一番大切なものです。「あれ？ これ何でだろう？ どうして？」という「驚き」が知的探求を動機づけます。「問題発見の能力」というのは、言い換えれば「驚く」能力ということです。”この素敵な文章を見つけたのは、「内田樹の研究室」というサイトです。「そうそう、そうだよね！！」と、すっかりうれしくなって、編集後記でこの文章を紹介することにしました。

本号の特集テーマである「医薬品情報を活かすコミュニケーション」とは、どんなコミュニケーションでしょうか？

対人コミュニケーションに関して言うならば、受け手の状況を踏まえず一方的に提供される情報は、どんな貴重な情報であっても相手には届きにくいものです。一人ひとりの患者さんの状況やニーズ、ライフスタイルに即した情報であれば、活かした情報といえるでしょう。では、どうすれば、患者さんのニーズを把握することができるでしょう。質問の仕方を工夫することも大切です。加えて、患者さんに関心を寄せて、「あれ、いつもと違うな？」と感じとったり、情報を提供しながらも「おやっ、どうしたのかな？」と、ささやかな変化を患者さんの表情から感じとる感性も大切です。（これは「観察」というスキルとして説明することもできますが...。）この「おやっ」こそ、患者さんのニーズに近づく手がかり、そして双方向のコミュニケーションの始まりとなるのです。

さて、本号から新連載「治験」がスタートします。さまざまな場や領域における治験について6回シリーズでお届けします。また、第7回総会・学術大会の寄書を掲載しました。参加出来なかった方にも、多くの「へーっ」や「なるほど」をお届けして、そこから新たなコミュニケーションが始まることを願っています。

(編集委員 後藤恵子)